

いのちの水

二〇一七年

一月号

六七一号

目次

- ・新しくなるために 1
- ・み言葉が古びないように 2
- ・古くて新しいみ言葉 3
- ・罪の赦しと清め 6
- ・旧約聖書の続編から 11
- ・休憩室 金星と木星他 13
- ・お知らせ 2月と3月の集会 14
- ・ことば
- ・集案案内



キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。(Ⅱコリント5の17)

新しくなるために

私たちは誰でも新しい心、新たな力を与えられたいと願う。しかし、どうしたらそのようなことが可能になるのか、といふかしがらむ場合が多い。

年齢とともに確実に、かつての情熱も衰え、実行するための体力や精神力も衰えていく。しかし、実に単純な道が備えられている。

それはキリストの内にある。ただそれだけである。(*)

：だれでもキリストの内にあるなら、その人は新しく創造された者である。

(Ⅱコリント5の17)

(*) 新共同訳はキリストに結びついてと訳されているが、原文は、*in Christo* 英語では、*in Christ* であるから、口語訳、新改訳のように、キ

ストの内にあると訳するのが外国語訳でも大多数を占めている。

キリストの内にある、それはただ、キリストを信じて仰ぐだけでよい。キリストを心から求めるだけで、私たちはキリストの内に置いていただける。求めよ、そうすれば与えられる、ということはこのようなことについてもあてはまる。

旧約聖書に現れるヨブという人物がたいへんな苦しみの中でいくら神に叫び、祈っても助けはないと感じた。そのため、自分は生まれてくるのでなかった、生まれた日はのろわれよーという苦しい呻きをあげるほどとなった。

しかし、それでも彼は神の御手の内に置かれていたのであった。神の時至って、ヨブ

はそのことに気づかされる。

この世に生きる限り、だれでも、その生涯に、日々の生活のなかに、だれもわかってもらえないのでないかと思われよう。なげなげと悲しみ、悩みを経験することになる。

それでも、「世界のあらゆる人々よ、私を仰ぎ望め、そうすれば救われる。」という啓示の言葉(イザヤ書45の22)にあるように、心を転じて神にキリストに向うだけで、私たちは神の愛のうちに置いていただける、そして、新しくされ、古びゆくことなく救われる。

み言葉が古びないように

どんなものでも、使わずに放置していたり、ときどき使っても手入れしないなら古びていく。

本や自転車や車、その他の機器類、また住んでいる家、畑、人間関係、そして自分の

心…。

植物においても、水をやらなかったり、雨が降らないときが長く続くとき、勢いは弱まり、古びていき、最終的には枯れてしまう。

私たちに与えられている神の言葉も同様である。

日々、神の言葉に心を注ぎ、新たに神から受けるのでなかったら、み言葉は、古びていき、力が失せて、ほこりをかぶったというような状態となる。

若き日に、神とキリストを信じて、生き生きとした信仰に生きていても、さまざまのこの世の不条理に心は疲れ、神は助けてくださらない、とか神の愛への疑問が生じたりすることがある。

また仕事や用務があまりに忙しいとき、静まって祈る時間も失われていくこともある。

そのような状態が続けば、神の言葉は、その人にとって古びて命を失っていくような状態となる。

年末のころにスカイプによる

集会に参加された遠隔地におられる方からのメールに、そのようなことが書かれてあった。

「日々に追われて集会に参加できず自分の中のみ言葉が古びていく焦燥感を抱えて年末を迎えていたので、今日の集会が与えられたこと本当に感謝しています。」

キリストが言われた言葉―「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」。(マタイ18の20)

という言葉を思いだす。イエスの名によつて集まる、イエス様を信じて、主イエスを仰ぐ心で二人、三人と集まるとき、そこにイエス様はいてくださる。

主イエスは、霊的存在であり、どこにでもおられる。そして聖霊として風のようにどこからともなく来てくださる。

それでも、このように、とくに二人、三人が主を仰ぎつつ集まるときに、そのただなかに

いてくださるという約束をされた。

これは、キリストを信じる者たちの集まりは、キリストのからだである―といわれていることから、複数の者たちが主によつて集まるとき、キリストの霊的からだをより実感できるようにしてくださっている現れたといえる。

主の名によつて集められるとき、それはキリストの体であるゆえに、キリストのいのちがその人たちにより多く流れはじめる。

毎日曜日ごとの礼拝集会が二千年、いかなる迫害があるうとも、事故や災害、さらに大きな戦争などが起こって神なごいなしと思われような状況にあつてもなお、キリストの名を慕つて集まるその集会は続いてきた。

それは、この集まりにはキリストご自身がいて、守り、霊的にうるおし、不思議な力でそうした集まりを維持してこられたからであつた。

そして、迫害やその他の事情で一つの集まりが失われていても、神はまた新たな集まりを起こされてきた。

主の名による集まりが、欠くことのできない重要性を持つために、神ご自身が世界のさまざまなところからそうした集まりを起こし、維持されてきたのである。

病気やその他の事情で、じつさいにそうした集会などで顔と顔を合わせて会うことができなくとも、電話やメール、手紙での交流によつても、二人が主の名によつて集まることとなるゆえに、小さな祝福が互いのうちに流れ始める。

神の祝福が注がれるとき、そうした集まりは大きな集まりになることもある。しかし、たった二人、三人でも真実な心をもって主を仰いで集まるとき、小さきものを慈しまれる主は、そこにも宝石のような輝きを持つ命を注がれる。

古くて新しいみ言葉 ―互いに愛し合うこと―

多くの人は、新しいものに関心を持つ。時間的に新しいものの―ニュースと言われるものは初めてのような感覚を持たせるので、誰でもが惹きつけられる。どこかで火事が発生した、地震で家々が壊れ、山が崩れた、不注意による事故で突然の悲劇が生じた、どこそこのチームが勝った、優勝した、等々それらの新しい出来事は、だれでも一時的に興味を持つ。

しかし、それらの新しいことを見たり、聞いたりしても、一番大切なもの―心が清められたり、敵対する者や弱い者、あるいは悪いことをするような人間に対してでも彼らが本当によくやるようにと願うような愛が深められたり、あるいは真実な心が強められるということがあるだろうか。

もしそうした出来事がそのようなよきはたらきをするもの

なら、昔はテレビもラジオもなくもつと前は新聞さえなかったころには、そうしたニュースは全くといってよいほど伝わらなかつたから、それに比べて現代は情報量において天と地ほどの大きな違いがあるから、とつくに現代の人間は、昔の人間よりはるかに真実で無差別的な愛があり、清い心となつていたはずであるが、現実にはまかつたかそうではない。

私たちが本当に良きものへと変えるものは、新しいものではないことがこうした事実を考えるとすぐにわかる。

本当に変えるものは、こうした時間的に新しいものでなく、時間を超えたもの―古くから続いてきたものである。

そのような古いもののなかにかこそ、本当に新しいものを見いだすことができる。このことは、中国の古代の賢人孔子の有名な言葉「温故知新」も古きものの重要性を告げている。

「古きをたずねて新しきを知る。」

「と読まれることが多いが、「温」という漢字は「あたたかい」という意味をもつているゆえに(*)、「古きを温(あたため)めて新しきを知る」とも読まれる。

(*) 語源辞典によれば、次のように説明されている。

「温という漢字の右側は、ふたをうつぶせて皿の中に物を入れたさまを描いた象形文字(音オン・ウン)。熱が発散せぬよう、中に熱気をこもらせること。温はそれを音符とし、水を加えた字で、水気が中にこもつて、むつとあたたかいこと。」

古いゆえに忘れ去られていて堅く冷たくなってしまったようなものを、大切に取り出し温める思いでそこにこめられた意味を見いだすということになる。

私たちが聖書を読むとき、とくに日本では大多数の人が、単に昔の本であり、自分には関係がないと思つているような内容を、心を注いで温めることで、そこからいわば真理が孵化されて現れてくる。そ

してさらに羽が生じて、自分以外の人たちにもその世代全体にも羽ばたいていくことさえある。

人間にとつて最も大切なこと、最も大いなるもの―それは弱き人、背信行為をするような重い罪を犯した人、また生きることから迷い出て死になつてしまっている人；そうしたさまざまの人に及ぶような愛、神の愛である。

そのような神の愛を与えられ、そこからまずその愛を同じ信仰を与えられている人同士で働かせ合うこと―そこにその神の愛が育まれ、周囲の世界にも伝わっていく。

そのことを、聖書は次のように現している。

…愛する者たちよ。わたしがあなたがたに書きおくるのは、新しい戒めではなく、あなたがたが初めから受けていた古い戒めである。

その古い戒めとは、あなたがたがすでに聞いた御言である。

しかも、新しい戒めを、あなたがたに書きおくるのである。

そして、それは、彼にとつてもあなたにあなたがたにとつても、真理なのである。

なぜなら、やみは過ぎ去り、まことの光がすでに輝いているからである。

(Iヨハネ2の7〜8)

古い戒めー古くからの神の言葉と言ひ換えることができる。

み言葉は、古くから存在し、かつ、現在も決してその輝きを失うことなく光り続けている。その光によって触れるものは常に新しさを実感する。

このヨハネの手紙のもとになっているのが、つぎのヨハネによる福音書にある記述である。

：あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべて

の人が知るようになる。」

(ヨハネ福音書13の35)

特別な儀式とか服装によつてキリストの弟子であることが知られるのではない。あるいは、学問があるとか、生まれが良いとか、特別な技術があるとか、人の関心を惹く話しか、単にキリストの教えを口で繰り返すなどでもない。

そのようなすべてに勝つて決定的なしるしは、キリストの愛をもつて互いに愛し合うということであるというのである。

この言葉が言われた時代は現代でも相当部分残っているがー身分(例えば、貴族と奴隷)や国家、民族、肌の色、貧富の差等々で大きく差別され、そうした人同士が兄弟のように愛し合うなどは考えられないことだった。

しかし、キリストは言われる。そのようなあらゆるこの世における違いと関わりなく、神から来る愛によつて互いに相手の祝福を祈り合い、具体的

にできることを実行するーそうした愛こそは、キリストの弟子であるーキリスト者であるということをも最もはっきりと表しているのだと言われている。

そのような愛には周囲の人たちも敏感であつて、その愛をもつて互いに愛しあうなら、周囲の「すべての人」が、互いに愛し合っている者たちが、キリストの弟子であるのを知ることができるという。

キリスト者同士が、神からくる愛をもつて愛し合う、互いに奉仕し合うことが、すべての人にキリストの弟子であることを証していくーそれほど神の愛の力は大きいということなのである。

互いに愛し合うこと

互いに：し合うことーその重要性を新約聖書はしばしば告げている。主イエスが言われた。「あなた方の敵を愛し、迫害する者のために祈れ」ーこの言葉は、同じことを強調

するために言い換えたのであつて、敵対する者への愛とはすなわちそのような人への祈りである。その悪意(悪の力、悪霊)が神の力によつて追い出され、そのかわりに神からの良き心が与えられますようにとの祈りである。(*)

(*)キリストの選ばれた12人の弟子たちにはまず与えられたのは、悪の霊を追い出す力であつた。(マルコ福音書3の15、マタイ10の1)それによつて、神の力が注がれ、魂や体の悪いところが癒されるようになる力だつた。

このように、他者への愛とは祈りと不可欠に結びついている。その点で、一般的には愛しているとは好きだということと同じと思われているが、キリストが言われている愛とは本質的に異なるものだと知らされる。

それゆえ、キリストが繰り返して言われた、互いに愛し合うということは、言い換えると、互いに祈り合う状態こそが、

キリスト者に求められているのがわかる。

そこから、他者が苦しんでいる状況とは、心身に重荷をかかえている状況であるゆえに、次のように言われている。

：互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。(ガラテヤ書6の2)

キリストの律法とは愛し合うことであり、当時はキリスト教が初めて伝わっていった時代であり、キリストを信じるだけでも迫害を受け、あるいは家庭での難しい問題が生じるなど、一般的な病気や悩み以外の重大な重荷がかかってくる状況にあった。それゆえ、少しでも軽くされるようにと互いに祈り合うことは、深い愛と不可欠に結びついていたのである。

そして、人間にはどんな時代、いかなる人でも、人生の歩み

のなかで必ず何らかの重荷がある状況は、形を変えて、いつの時代にも生じてきた。

それゆえ、この「互いに重荷を担う」ということ、互いに祈りをもって担い合うことは、真理であり続けてきた。

とくにキリスト者同士が互いに愛し合い、祈り合うのは、信徒はキリストの体であるということからもあるべき状態なのだとわかる。

：わたしたちは、キリストの体の一部なのである。

(エペソ書4の25、5の30)

：体の一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれるなら、すべての部分が共に喜ぶ。

あなた方はキリストの体であり、また一人一人はその部分である。(Iコリント12の26、27)

そしてこのことと共通することであるが、愛とは相手に神からの良きものが与えられる

ように祈ることであり、そのことが仕えるということである。

キリストは、「仕えられるために来たのでなく、仕えるために来た」と言われている。(マルコ10の45、マタイ20の28)

仕えるとは、奴隷のように何でも命令どおりにすることではなく、最もよきものを相手に提供しようとするのである。

それゆえに、あらゆる人間を生み出したもとの関係である夫婦という基本的関係においても、あるべき姿は、互いに仕え合うということになる。

：キリストに対する畏れをもって、互いに仕えなさい。

妻たちよ、主に仕えるように夫に仕えなさい。

夫たちよ、キリストが信徒たちのためにご自分を捧げられたように(命を捨ててまで、愛したように)そのような愛をもって妻を愛しなさい。

(エペソ書5の21、25より)

パウロは別のところでも、次のように一般的に、「互いに仕える」ということと愛が結びついていることを示している。

：兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。(ガラテヤ書5の13)

こうしたキリスト者の生活の一切にかかわる重要なことゆえに、ヨハネの手紙において、繰り返し「互いに愛し合う」ことが記されている。

：互いに愛し合うこと、これがあなた方が最初から聞いている教えだからです。(Iヨハネ3の11)

：愛するものたち、神がこのように私たちを愛されたのですから、私たちも互いに愛し

あうべきです。互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにどどまってくたさる。(同4の11) (ほかに、Iヨハネ3の18、23、4の7、IIヨハネの5など)

このように、驚くほど多く繰り返し言われている。

そしてその出発点にあることが、キリストのうちに留まること、そしてキリストが私たちの内にとどまってくたさることである。

それゆえに、キリストは、最後の夕食の席上で言われたこととして繰り返し、つぎのように言われた。

：私に つながっていないさい。

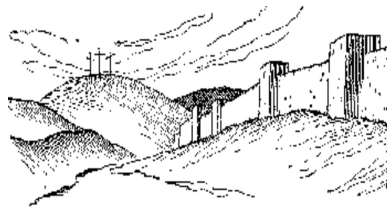
そうすれば私もあなた方につながっている。(*)

人が私につながっており、私もその人につながっているなら、あなた方は豊かに実を結ぶ。：私の愛にとどまっていないさい。

(*) 「つながっている」と訳された原語はその後で、「(私の愛に)

とどまって」と訳されている原語と同じで、メノーである。英語では、remain in あるいは、abide in と訳される。

イエスのうちにつながる―とどまるとは、イエスの愛のうちにとどまることであり、それゆえにそれによって私たちがイエスの愛を受けることができる。その愛をもって他者をも愛することができるようになる―実を結ぶというのである。



罪の赦しと清め

―詩篇51編

聖書に含まれる詩集―それは詩篇と言われているが、それは人間にとつてとくに重要なことを、神から示されて詩的

な表現で書かれている。詩篇全体が深い祈りに満ちた詩である。

キリストの最も苦しい最後のとき、十字架での「エリエリレマ サバクタニ」との叫びがすでにそれより千年ほど昔の詩の作者―ダビデと伝えられてきた―の詩22篇にそのまま現れていたことは驚くべきことである。

これは詩篇の詩がいかに深い内容をもっているかを暗示し、またはるか後に生じることの預言ともなっているのがわかる。

3節 神よ、わたしを憐れんでください
御慈悲しみをもって

深い御憐れみをもって

背きの罪をぬぐってください。

4 わたしの咎をことごとく洗い 罪から清めてください。

5 あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。

6 あなたに、あなたのみに

わたしは罪を犯し 御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しくあなたの裁きに誤りはありません。

この詩は三千年ほど前のイスラエルの王、ダビデの詩である。そのようなはるか古代の日本人が具体的にどのようか考え、感じていたかは文字がなかったので一切分からない。

詩篇は心の化石のようなもので、大昔の作者の心がそのまま現代の私たちにも感じ取れて、深い共感を覚える。

ダビデは子どもの頃から信仰があり、どのような勇士たちも立ち向かうことさえできなかった大男に対して、ただの石投げをもって倒した勇敢な武人でもあり、王となってもその采配力は卓越していた。他方、堅琴を弾き、詩をも作る多彩な人であった。

そのようなダビデが王となつて周囲を平定したが、そのあとに大変な罪を犯した。しか

し不思議なことにその罪が分
からず、だいぶ後に預言者ナ
タンが来て、その罪をはつき
り指摘して初めてダビデは目
が覚めた。

この詩はこうした重い罪を犯
してしまった人間の心、神に
その赦しを祈る切実な心情が
吐露されている。

3節、原文では、まず、「憐
れんでください」(ホネネー
ニ(*))から始まる。

(*)へブル語のホネネーとは、
ハーナン(憐れむ)という動詞の命
令形であり、「私を憐れんでくださ
い」は、「私を」意味する接尾語が
付くために、ホネネー二となる。

外国語訳ではそれがはつきり
と表されている。(Have
mercy upon me, O God, ...)

詩の作者が犯した罪があまり
にも重いものであるとき、た
だその単純率直な祈り、叫び
がまずあふれるように魂の深
いところから出てくる。

しかし、現代の私たちにとつ
ては、「憐れむ」という言葉

はあまりいいニュアンスをもつ
ていないことが多い。憐れん
でくださいーという言葉は、
昔乞食が道端で多かつたとき
に、通りがかりの人にお金や
食物を願うときに言うような
言葉として連想しがちである。
このように、聖書の時代とそ
の人にとっては、きわめて重
要な言葉であつても、日本語
に訳されたときには、その力
を感じさせないということが
ある。それは言葉の壁である。
時代がはるかに異なり、まっ
たく異なる民族、国での言葉
はどうしても現代の日本人に
は、びんとこないというところ
がある。

ダビデの犯した罪とは、とり
かえしのつかない罪であり、
それは本来なら死をもつて償
わねばならないほどのもので
あつた。

それゆえに、その罪の深さ、
重さを思い知らされたときに
は、ただ、必死になつて神に
向かい、叫ぶほかはなかつた。
それがこの冒頭の叫びを表さ

れている。

聖書においては、神に向つて
の「憐れんでください！」と
いう祈りや叫びは、この詩篇
のように、重い罪を犯したた
めに、生きるか死ぬかという
重大なときの祈りとして、ま
た新約聖書では、悪の霊に極
度に苦しめられ、火の中、水
の中に倒れる、また異邦の女
性の娘が悪の霊にひどく苦し
められているときに、医者や
ほかのあらゆる方法ではどう
にもならないため、キリスト
への全面的な信頼をもつて、
「主よ、憐れんでください！」
という叫んだことが記されて
いる。(マタイ15の22、17の15)

さらに、生まれつきの全盲の
人が、道端に出してもらつて、
通りがかりの人の足音や話し
声が聞こえたら誰彼かまわず
に、施しをもらうために立つ
ていた盲人の叫びとしても記
されている。

イエスだけは神と同じ方だか
ら、愛と全能の力を持つてお
られると信じて、周囲の人た

ちの妨げや、黙れという制止
する声をも聞かずに、その積
年にわたる祈りと願いを、
「主よ、憐れんでください！」
という一語にこめて叫んだの
である。

とくにマタイ福音書では、同
様の記述が、二回重ねて記さ
れている。(マタイ9の27、
31、同20の29、34)これは、
当時の生まれつきの全盲の人
の苦しみや悲しみ、あるいは
孤独がいかに深かつたかをマ
タイは深く共感し、神がその
ように、二重に記すように導
いたと考えられる。

こうした人間の最も深い闇か
らの救いを求める祈り、願い
として、「主よ、憐れんでく
ださい！」という言葉がある。
この言葉は、ギリシャ語では、
「キリエ エレイソン」という
が、こうした聖書の背景のゆ
えに、ミサ曲では、必ずこの
言葉が含まれている。(*)

それは、ギリシャ語の、キュー
リエ エレイソンが、短音
となり、キリエ・エレイソン

と言われるものである。

(*) キリエ・エレインソンとは、Kerrie Alison。キリエとは、キュリオス (主) の呼称。主は (主が) という場合は、キュリオス、「主」よというときには、キュリエとなり、さらに短い母音になったもの。
エレインソンは、エレエオー (憐れむ) の命令形。

こうした生と死をさまよっているような状況で発せられる叫び (祈り) であるから、このひと言の祈り「キリエ・エレインソン」は、それを心にあたたためつつ賛美するとき、この祈りだけで尽くされる。

憐れむとは、上から見下すようなニュアンスでなく、深い愛から出るまなざしである。長年の苦しみや悲しみをすべてすくい取る愛であり、そこに新たな力を注ごうとするお心である。

私たちはただ、神の一方的な憐れみによって救いを得たのであった。

私たちが何か、大いなる災難や災害、苦しみに出会ったと

きにも、長い祈りはできない。しかし、この祈りだけは、できる。
「主よ、憐れみたまえ」と。

7 わたしは咎のうちに産み落とされ母がわたしを身ごもったときもわたしは罪のうちにあったのです。(7節)

この作者は、自分の罪というのは、あとからそのような状態になったのではなく、正しい道から絶えずはずれてしまう、ということ、生まれる前から自分の本性に深くしみついていっているのだとわかっていて人間は、正しいあり方というものや、真実な愛というものは、直感的にだれでもわかるにもかかわらず、実行することができない。嘘つきや盗み、いじめをする人、理由なく暴力や振るったりするのは悪いと知っている。そのようなことをしたらいけないのを忘れていた―などという者はいない。

い。
それほど、わかっていながら、守れないというところに、原罪といわれるほどに根深いものがある。

8 見よ、あなたは真実を心のうちに求められます。

それゆえ、わたしの隠れた心に知恵を教えてください。(*)

(口語訳 8節)

(*) この節の訳は、外国語訳や日本語訳のほとんどすべてが、右の口語訳のような訳となっている。

・ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。(新改訳)

・ You desire truth in the inward being; therefore teach me wisdom in my secret heart (NRS)

・(2)で、心の内と訳された原語トウワーホートは、この詩篇の箇所以外では、ヨブ記38の36だけにしか用いられていない。そこでは、この箇所のように「心」の内に知恵を置く」と訳されるが、別の訳は「雲」の内に知恵を置くとも訳されている。

しかし、新共同訳だけが、「あなたは秘儀ではなくまことを望み 秘術を排して知恵を悟らせてくださいませ。」と訳している。ここで、前後の内容を

見ても、いきなり「秘儀」とか「秘術」などという言葉が出るのはいかにも違和感がある。こうした訳語はこの箇所の訳を担当した人の個人的な解釈、考えが強くでていると思わせる。こうしたことは折々に見られるので、とくに詩篇のような一つ一つの言葉が重要な意味を持っている文書においては、一つだけの訳でなく、ほかの訳も参照することが重要になる。

9 ヒソプの枝でわたしの罪を払ってくださいわたしを清くなるように。わたしを洗ってください 雪よりも白くなるように。

ヒソプとは、清めるときに使う植物。雪のように白くという願いは、この作者が自分の罪による汚れを深く実感していたゆえに、それを根底から清められたいという強い願いがあったのをうかがわせる言葉である。

雪よりも白く―それは現実にはない、ただ神の完全な清い本質だけが雪よりも白く、と言える。雪は白くともすぐに

汚れるが、神の完全な清さはいかなることによつても汚されることがない。

雪よりも白く、神のように完全な清いものとしてくださいーという願いである。

聖書の世界には、どこまでも清くー神はそのような本質を持ってしていると啓示されている記述がある。

主イエスがただ三人の弟子たちとともに高い山に登ったとき、イエスは太陽のように輝き、その衣は光のように白くなった。

ここで、イエスこそは、かつて預言者ダニエルが啓示のなかで見たことー神は雪のごとく白かったとあるのを、キリストも神と同じ本質を持ってあるゆえにこのように、十字架刑で死する前にはつきりとイエスの本質が啓示されたのだった。

(マタイ17の2、ダニエル書7の9)

また、キリストの復活を知ら

せるために来た天使については次のように言われている。 : その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。

(マタイ28の3)

ほかに、キリストの十字架の血によつて白くされた人たちなどが、白い服を着ていることがつぎのように繰り返して現れる。

：勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。

(黙示録3の5)

こうした清められることへの強い願いと、それが実現されるのが聖書の重要な内容となつている。

そしてその汚れない姿を常に人間に見せるために、神は罪に汚れないものを、世界の到る所に置かれた。それが自然の風物である。

いつも目にする大空やその雲、青空の青い色、夜もまた完全な清さを象徴する星の輝きを全天にちりばめてくださった。

地上では至るところに見られる草木の姿も、それらに咲く花々も、人間にはない清いもの、美しさをまとっている。

山に行けば、そうしたそこで

目に入るあらゆるものは、清いと実感する。山々のつらなり、そこに吹きわたる風、とくにたちこめる霧、そして谷川のせせらぎやその透明な水や真つ白いしぶき、高山にある雪、小鳥のさえざり、季節によつて咲く高山植物や紅葉などの純粋な美：：

人間は罪に汚れている存在であるが、そこから神の国の清い世界へと導かれようとされる神は、到る所にそのような清い世界を繰り広げ、かつその清い姿を無限の神秘で包まれている。

そのようにして清くー白くされることへと招いておられるが、それでも汚れからどうしても抜け出せない人間のために、キリストが来られ、そして十字架において死んでくだ

さるほどに、神は人間を愛して、その汚れー罪からの救いを与えようとしてくださったのを思う。

10 喜び祝う声を聞かせてください

あなたによつて砕かれたこの骨が喜び躍るように。* わたしの罪に御顔を向けず 咎をことごとくぬぐってください。

「骨が喜び躍る」このような表現をそのまま受け取るなら何か異様な表現と感ぜられる。それは骨という言葉が、数千年も昔の、日本と遠く離れたユダヤの地方では現代とは大きく異なるニュアンスを持っていたからである。

骨は体の内部にあって全身を支えるもの、それゆえ人間の奥深い本質を指して用いられることがある。骨が喜び躍るとは、心身が喜びにあふれる、という意味となる。

創世記の最初に、アダムのた

めにエバが創造され、そのエ

バを見て、アダムが、「これ

こそ、私の骨の骨」といった

ことが記されているが、これ

もそのままの現代の骨という

生理学上の意味として受け取

ると不可解な表現としかわか

らない。これは、このエバこ

そ、私の内奥で一致する存在

だ、ということなのである。

罪のために、厳しい裁きを受

けて、心身がたちゆかないほ

どになった。しかし、どうか

神様、お前の罪は赦されたと

いうみ言葉をください。そう

すれば、私の喜びは回復する

のですーという意味で言われ

ている。

(*) わかりやすく訳された英訳の

一つをあげておく。
Oh, give me back my joy again; you
have broken me — now let me
rejoice. (NLT)

授けてください。

この詩の作者の強い願い、そ

れは自分の努力や他人の感化

などでは到底かなえられない

ことー魂が根底から清くされ

ることであった。

それは、いかなる人間の力に

よつてもできない。

このような罪の本性は、どん

なに科学技術が発達しようと

も、教育や生活の豊かさがあつ

てもどうにもならない。人生

経験豊かであっても、またさ

まざまの外国旅行をして経験

を積もうとも、それでも変え

ることはできない。

むしろ、科学技術も教育もな

されず、貧しい昔の人々がか

えつて純真な清い心を持つて

いたと言えるほどである。
そのために、万物を創造し、
かつ現在のそれを維持し、新
たな創造を続けておられる神
に、私の心のなかに、清い心
を創造してくださいーという
願いを訴えている。

「」で「創造する」(create)

という動詞は、単に「作る」

(make) というのとは根本的

に異なる。

作るとは、すでに存在するも

のをういて別のものを生み出

すことである。人間の科学技

術はすべて「作る」である。

鉱石から鉄などの金属を取り

出して、鉄製のさまざまの便

利な器具を生み出すこと、こ

れは鉱石も神が創造したもの

であり、それから鉄という金

属を取り出すことも、人間の

存在以前からこの宇宙に創造

されていた物理や科学的法則

を用い、さらにそうした技術

を生み出し、考える頭脳や手

足が動くこと、人間の存在そ

のものーそうしたすべては人
間が作ったものでなく、神が
創造したものである。
創造とは、無から生み出すこ
とであり、ただ神のみがなす
それゆえこの創造するという
動詞バーラー(ヘブル語)は、
聖書の巻頭にある、天地創造

のところで用いられている。

イザヤ書においては、つぎの

ように用いられている。

： 見よ、わたしは新しい天

と新しい地を創造する。

以前にあったことを思い起こ

す者はない。それはだれの心

にも上ることはない。

代々とこしえに喜び楽しみ、
喜び躍れ。
わたしは創造する。見よ、わ

たしはエルサレムを喜び躍る
ものとして
その民を喜び楽しむものとし
て、創造する(イザヤ書65の
17-18)。

この世界がいかに混乱や空し

さ、悪に満ちていようとも、

時いたれば、神はそれら一切

の古きもの、悪の支配を根底

から打ち破り、新しい天と地

を創造される。

人々は、以前にあったことー

昔の罪ふかい人間のこと、悪

に満ちたこの世界のことなど
を思いだすことはなく、すべ
てのまなざしは神が創造され

ようとして、新しい天と地へと向けられる。

そのように、この詩の作者は、自分の心に神の全能の力によって新しい清い心を創造してください、と祈る。そして神の力を堅く信じるゆえに、そのことを確信している。

そして清い霊を創造するのは、神であり、新たな霊を与えられることであるの知らされていた。

それは、はるか後に現れたキリストのなさったことを預言するものでもあった。

キリストは、復活してまもなく、使徒たちに聖霊を与えることを約束され、そして実際に信じるものに、聖霊を与えて、その魂の変革をされ、力を与えて新しい道へと導かれるようになった。

：ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなた方はまもなく、聖霊による洗礼を授けられる。

(使徒言行録1の5)

このように当時の多くの宗教

的指導者が重んじていた、捧げ物とかに関する儀式ではなく、神の霊の重要性を深く啓示されていたこの詩の作者は、同時に、本当の献げものは何であるかを深く示されていた。

今から数千年も昔から、真の神への献げもの、神の喜ばれるものは、目に見えるいろいろなものでなく、砕かれた心、ただ神のみに向う幼な子のような心であることを知らされていたのである。

17 主よ、わたしの唇を開いてください。

この口はあなたの賛美を歌います。

18 もしいけにえがあなたに喜ばれ、焼き尽くす捧げ物が御旨にかなうのなら、私はそれを捧げます。

19 しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。

打ち砕かれ悔いる心を 神よ、

あなたは侮られません。

この詩篇51編は新約聖書のあり方と深い共通点を持つている。三千年たっても今の私たちに深く当てはまる。

現代の私たちにおいても、様々な目に見えるもの、あるいは目に見えない活動などを神に献げることができなくても、みずからの罪を知り、神の前にひざまずく心、砕かれた心は誰でも献げることができる。

そして、その罪を赦していただき、清めていただく。このためにキリストが来られたのである。

この詩の作者は、死刑にも相当するような重い罪を犯したため、本当に自分の心の中には良いものがないことを思い知らされた。しかし神様は万能で愛のお方だから、何も無い私の心にも清い心を創造してください、そして聖なる霊を与えてくださる。

清い心を創造していただき、

聖霊を与えられること―これは私たちの日々の祈りでもある。神が私たちを見られるなら、どんな人間も清くない。

パウロも自分のことを土の器と言った。でもどんな汚くても壊れやすくともだからといって絶望することはない。

神は、私たちがただ心を神に向けて、真実に求めるとき、そこに清い心を創造してください。

この古き詩は、そのまま現代の私たちの願いや祈りと重なって、私たちを励まし、生かすものとなっている。

旧約聖書の続編から

○：全能のゆえに、あなたはすべての人を憐れみ、回心させようとして、人々の罪を見過ごされる。

あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。

憎んでおられるなら、造られなかつたはずだ。

あなたが望んでいないのに存続し、

あなたが呼び出されないのでに存在するものが

果してあるだろうか。命を愛される主よ、

すべてはあなたのもの、あなたはすべてをいとおしまれる。

(知恵の書11の23〜26)

・ここには、深い神への信頼、その愛への確信がある。

神の愛は万人に及んでいて、そして救おうとされている。

人間だけでなく、この自然の世界もすべて神が愛されるゆえに創造されたのだと。

○：(神の英知は) 人間を慈しむ霊である。

神は人の思いを知り、心を正しく見抜き、

人の言葉をすべて聞いておられる。

主の霊は全地に満ち、すべてをつかさどり

(人が語る) あらゆる言葉を知っておられる。(同1の6〜7より)

・神は全能ゆえにすべてを聞いておられる。そしてつねに

その適切な報いを与えておられる。私たちも神の英知のほんのひとしずくでも与えられるとき、神とその創造された自然に聞く耳が与えられることを期待できる。

○主を愛することこそ、輝かしい英知。
(シラ書一集会の書一1の10より)

○主を敬い続けて、見捨てられた者があつたか。

主を呼び求めて、無視された者があつたか。

主は慈しみ深く、憐れみ深い方。

私たちの罪を赦し、苦難のときに助けてくださる。

(同右2の10〜11より)

○いかに多くを語つても、決して語り尽くせない。

「主はすべてだ。」このひと言に尽きる。(シラ書43の27)

(*) 旧約聖書の続編とは、外典(アポクリファ)とも言われる。ヘ

ブライ語で書かれた旧約の部分を「正典」とし、紀元前3世紀にエジプトでギリシア語に訳された『七十

人訳聖書』Septuagintaのなかに追加されてある部分を「外典」という。

新共同訳では、続編という名称で続編付きの聖書として発行されている。

キリスト教の最初の使徒たちの用いていた聖書は、ヘブル語の旧約聖書でなく、ギリシア語に訳された70人

訳といわれる旧約聖書を用いていた。しかし、ルターが聖書をドイツ語に

訳したときに、ヘブル語の旧約聖書から訳したため、プロテスタントでは、続編のない旧約聖書が一般的とな

っている。しかし、使徒たちが用いたものであり、二千数百年の歴史

を越えて残されてきた書であり、ここに引用した箇所からもうかがえる

ように、聖書とほぼ同様な内容を持っている書が多い。

プロテスタントの聖書では続編を含んでいなかったため、その内容をよく読むことなく、続編を退けている

人が多いが、正典とされている現在の旧約聖書のエステル書や雅歌には、

神という語や信仰あるいは信頼という言葉が一度も使われていないので

あって、とくにエステル書が引用されることはほとんど見かけない。それらより、はるかに続編の「知恵の

書」(「ソロモンの知恵」)、「シラ書」(ベン・シラの書、あるいは集会書とも

言われる。ベンとはヘブル語で子という意味であり、ベン・シラとは、シラという人の子という意

味)」などが、真理に満ちた内容であり、旧約聖書の箴言と共通の内容が多い。またマカベア書は、旧約聖書のダニエル書の理解には不可欠の書であり、旧約聖書から新約聖書の時代に起こった出来事を知るためにも必須の書である。

ことば

(399) 痛みを感じるまで、愛しなさい。(マザー・テレサ)

Love until it hurts.

・キリストは痛みを感じるほどに死に至る苦しみと痛みを受けてまで、私たちが愛してくださいったことを思う。

本当の愛は、敵対してくる者のために祈って、なすべきことをなそうとするようにはたらくゆえ、痛みや重荷を感じることにつながる。

(400)

たとえ聖書のすべてを外面的に知り、あらゆる哲学者のいつたことを知るとしても、神の愛と恵みがなければ、そのす



べてに何の益があろう。

(「キリストにならいて」1の3ト
マス・ア・ケンピス著)

・新約聖書にも、「たとえ、あらゆる神秘と知識に通じていても、愛がなければ、無に等しい」(1コリント13の2)とある。

(401)心の深みから発せられた言葉でなければ、あらゆる言葉は無意味です。

(マザー・テレサ)

If they do not come up from the depth of our heart, our words are meaningless.



休憩室

○金星と木星

1月中旬ころには、夜明け前のまだ暗いとき(5時半ころ)、南の空に強い輝きの星が見えます。それはほとんどの星のようにきらきらと瞬くことなく、じつと見つめるように光っています。それが木星です。

そのすぐ下に、木星よりだいぶ弱い光ですがそれでも、明るい星が見えます。それが、春の星座として知られている乙女座の一等星スピカです。

スピカだけを見つけることは、星座に知識がない場合には、やや難しい場合がありますが、現在は、木星の特別に明るい星のすぐ下にありますので、だれでもすぐに分かります。

金星や木星など惑星は、見える場所が動いていくために、一般の星座表にも掲載されていないこともあり、その名前は子供のときから広く知られ

ているにもかかわらず、実際には見たことのない人が圧倒的に多い状態です。

また金星はさすがに夕方に見えるときは宵の明星として特別に夕空に群を抜いて明るいので、知る人もいますが、木星となると大多数の人にとっては名前だけのものになっていくようです。

この星の澄んだ光は、強く見つめるように光っているために、古代からも注目され、この星の英語名である Jupiter ジュピターは、ローマ神話で

の最高の地位にある神の名です。金星とちがって、地球の外側にあつて遠くにあるため、長期にわたって夜通し見えることもあり、そのうえに金星を除いて圧倒的な明るさをもつ

ていて、夜空の王者のごとくに見えるゆえに、このような名前が付けられたと考えられます。金星は木星より明るいけれども、地球軌道の内側に

あるため、夜明け前や夕方に見えないのです。わかりやすく言えば、太陽に近いので、太陽の上がる夜明けとか日没にしか見えないわけです。

木星の上方にも橙色の強い輝きの星が見えます。これが牛飼座の一等星アークトゥルスで、乙女座のスピカとならんで春の代表的な星です。

1月2日の夕方暗くなつてから、西の空には、三日月状の月のすぐそばに宵の明星の金星が並んで見えるという珍しいすがたが見えました。

さらに、その翌日には、その月のすぐ右下部分に、火星が見えるという位置関係になり、これもとても珍しいことです。このように、続けて月と金星、翌日は月と火星がすぐそばに並んだということは、私の過去の記憶にはありません。

火星はこの時期1等星程度の明るさがありました。すが、すぐそばの月がはるかに明るいので

で、よく見ないと見つけれなかつた人も多いかと思われたことです。

ふだんから、いつの星空でも心してみるとときには興味深く、さまざまのことを語りかけてきますが、とくに今回のような珍しい現象は、まだ星に關心のない方々にも新たな関心を抱くきっかけとなったりします。

なお、1月中旬ころには、明け方には、土星も東の空に見えるようになっていきます。夜明け前に東の空を見ることは、都会でもまだ比較的静かと思われまので、木星を見たことのない人は、ぜひ晴れた日の早朝に東の空を見て、はるかな遠くから投げかけられているその透明な光に接してほしいと思います。

それは目に見える神の言葉と、いづれきものだからです。

お知らせ



○「野の花」文集ができました。余分を必要な方は、一冊300円(送料込)でお送りできます。

○故藤井美代子姉の納骨式：1月29日(日) 13時30分よりキリスト教霊園にて。

○2月に吉村孝雄が、神戸の阪神エクレシアと大阪の高槻聖書キリスト集會に参加の予定日は次のようになっていきます。

○阪神エクレシア：2月12日 午前10時〜12時。

・場所：元町駅前兵庫県私学会館。

・連絡先：川端 紀子 電話 078-578-1876

E-mail: kawabata@kjd.biglobe.ne.jp

○高槻聖書キリスト集會 2月12日午後2時〜

・場所：高槻市塚原5-1-15 那須佳子宅 電話0726-93-7174

○名古屋での内村鑑三記念講演会にて、吉村は話をさせていただきます。

・日時：3月12日13時30分〜

・問い合わせ：浪川幸彦

・問い合わせ：浪川幸彦 nami.kawa@sugiyama-u.ac.jp

電話 052-808-3245

○「祈りの友」に関する問い合わせが、先日も熊本の未知の教会の方からありました。

祈りは教派とかは関係ないことですので、どなたでも「祈りの友」に関心ある方は左記の吉村孝雄まで。

徳島聖書キリスト集會案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日午前10時30分〜

(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の川

宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集會：第二水曜日午後一時から集會場にて。・北島集會：板野郡北島町の戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より)。

北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)。

・天宝堂集會：徳島市応神町の天宝堂はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日午後8時。

・海陽集會、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第一火曜日午前10時より)。

・いのちのさと集會：徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より)「いのちのさと」作業所)。

・藍住集會：第二月曜日の午前10時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)。

・小羊集會：徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院にて。

毎月第一月曜午後3時〜。・つゆ草集會：毎月第4日曜日午後一時半〜。徳島大

学病院8階個室での集まり。・第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の

会、問い合わせは左記。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)

郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。

(これらは、いづれも郵便局で扱っています) E-mail: pistis7tv12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集會」)